

特殊な組織型を示した浸潤性乳癌の一例

山梨大学医学部附属病院病理部¹⁾，同 病態病理診断学講座²⁾

○石井喜雄(CT)¹⁾，弓納持 勉(CT)¹⁾，中澤久美子(CT)¹⁾，坂本直子(CT)¹⁾，
岩佐 敏(MD)¹⁾，村田晋一(MD)²⁾，加藤良平(MD)²⁾

【症例】42歳、女性。約1年前より左乳房腫瘍あり、半年前から増大傾向があったため、当院を受診した。画像上、ABE領域に直径40 mmの辺縁不整な腫瘍とその周囲に数個の結節が認められた。穿刺吸引細胞診にてductal carcinoma, Class Vと診断され、左乳房切除術が施行された。

【細胞診所見】標本上、細胞密度が高く重積性著明な充実性構造の大集塊と管状構造を示す小集塊が認められた。細胞集団辺縁では、ほつれ傾向が明瞭であった。また、細胞相互封入像や鋳型状に連なる細胞が多数認められた。個々の細胞では細胞質は殆どみられず、密集した細胞核は異型性が強く、クロマチンは細顆粒状で濃縮状の変性核のものと混在していた。

【肉眼および組織所見】断面では、複数の白色結節から成る大きさ4.5×4.0 cm大の腫瘍を認めた。腫瘍は、2つの異なった組織成分から成っていた。1つは、筋上皮細胞を伴い、細胞異型の弱い細胞で構成される腺管構造を示す部分で、唾液腺や皮膚付属器由来の腫瘍に類似する像も見られた。他の1つは、高度な異型性を示し大型類円形核を有する細胞で構成される充実性構造を示す部分である。ごく一部には、adenoid cystic carcinomaに見られるcribriform patternが見られた。免疫組織学的には、SMAやS100蛋白陽性の細胞が、腫瘍腺管周囲の筋上皮のみならず、腫瘍細胞の中にも認められた。以上より、high grade carcinoma arising in atypical microglandular adenosisと診断した。

【免疫細胞学的所見】細胞診標本においては、筋上皮細胞に対する抗体が陽性の細胞は、充実性構造の辺縁および血管に対して柵状に配列する部分に多く認められた。また、筋上皮細胞が様々に混在する所見がみられた。